大日本武徳会に関する研究

筒井　雄大　（　筑波大学　）

１．目的

本研究の目的は、武道を牽引しつつ激動の歴史を刻んできた大日本武徳会の変遷を具体的な様相から明らかにするため、その第一段階として設立当初の様相を詳細に把握することである。

２．研究方法

先行研究にならい､新聞を読み解くことにより、論を構築していく。

１）取り扱う新聞としては、先行研究において、近代日本のスポーツジャーナリズムの礎を築いたと言われている『大阪毎日新聞』と、先学では取り扱われていない『東京日日新聞』とする。

２）分析・考察の対象期間としては、大日本武徳会設立日及び日清戦争終戦日である明治 28 年（1895）～日露戦争が開戦された年である明治 37 年（1904）の 4 月 17 日とする。

３）分析・考察の方法としては、本研究対象期間の大日本武徳会関係記事・広告を網羅的に調査し、データベース化した上で、同系統のもの分類し、武徳会の具体的な様相を明らかにする。また、日清戦争終戦から、日露戦争開戦に向けての武徳会の様相の変遷にも焦点を当て考察を行う。

３．結果と考察

設立から 9 年間の武徳会関係記事・広告を調査した結果、記事・広告数としては『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』合わせて、記事 229 項目、広告 65 行を確認した。数多くの武徳会関係記事・広告から、第１回～第８回武徳祭大演武会、武徳会青年演武会、短艇競漕会、武徳会組織又は事業に関する様相等が見受けられた。その中でも注目すべきは、第１回武徳祭大演武会を参観しに来ていた外国人が､武徳会に数名入会していたことである。先学において第１回武徳祭大演武会には当時の日本の兵制に関わったイギリス領事、フランス領事及び武官が、夫人同伴で観覧しに来ていたことが明らかとなっているが、穿った見解を述べるならば、この中の数名が武徳会に入会した可能性が考えられる。設立当初から外国人にも開かれた先進的な組織であったことが窺えた。

その他にも数多くの武徳会に関する様相が確認されたが、日清戦争から日露戦争開戦までのこの期間では随所に日本陸軍、日本海軍と武徳会の関りを示すような様相も数多く確認された。

４．結論

本研究で確認できた記事・広告の全体を総じて俯瞰してみると、近代日本陸海軍の兵制に多大な影響を与えた英国と仏国領事及び武官を第１回武徳祭大演武会に招聘していること、陸海軍関係者が大いに関わっていること、海軍関係者が関わって、本来近世の武芸十八般にも現在の日本武道協議会に加盟する武道種目にもない短艇の競漕会が行われていた様相が明らかとなった。このことから勘案すると、通説では警察組織との繋がりが強いと言われている武徳会だが、日清戦争から日露戦争までのこの期間に設立展開した武徳会はやはり、軍部との密接な関係もその大きな特徴としてあげるべきであろう。

５．主な参考文献

・坂上康博「論説　大日本武徳会の成立過程と構造―1895～1904―」行政社会論集,1 (3)・(4) ,59, 112,1989.

・財団法人全日本剣道連盟『通算 100 回大会記念出版全日本剣道演武大会のあゆみ―明治期にみる武徳祭大演武会』,財団法人全日本剣道連盟,2004.

・帝國聯隊史刊行會『歩兵第九聯隊史　附下士優遇及志願心得』帝國聯隊史刊行會編纂,1918.

等